

北斎と葛屋重三郎

2025年のNHK大河ドラマ「べらぼう〜葛屋栄華乃夢噺〜」。

数々の名絵師・名作を世に送り出した「江戸のメディア王」葛屋重三郎が主人公です。

通称「葛重」は、葛飾北斎とはどのような関係だったのでしょうか。

北斎の研究者である、安村敏信先生に伺いました。

葛屋重三郎(1750～97年)といえば、錦絵の黄金期を代表する喜多川歌麿、東洲斎写楽を生み出した版元として知られている。版元とは現在の出版社にあたり、企画や絵師の選択などのプロデュースを行ったところだ。葛屋と北斎は、どのような関係にあったのだろうか。

葛屋重三郎は喜多川柯理といい、本姓は丸山氏。寛延3(1750)年に生まれたが、7歳のとき母と離れ喜多川家(葛屋)の養子となった。

24歳のとき、吉原にある義兄の店を間借りして『吉原細見』という吉原遊郭の案内書を小売りし始め、26歳で自ら版元となって

『雛乃花』という新趣向の吉原細見を出版して注目される。この年には本格的な遊女絵のシリーズ『雛形若菜の初模様』を11図出版し美人画の世界に足を踏み入れる。

翌27歳では自ら序文を書いて出版した『青楼美人合姿鏡』で、北尾重政と勝川春章を絵師として起用し、勝川派とのつながりをもつ。春章のもとでは、のちの北斎である勝川春朗が画業に励んでいた。

寛政3(1791)年、老中松平定信の寛政の改革で表現への規制が厳しくなったことから、葛屋は山東京伝作画の洒落本三種の出版により、財産半分の没収という処罰を受ける。が、葛屋は美人画で世間を驚かせる秘策を胸に、次の役者絵への企画を進めようとし、北斎に目をつけ、細判で役者絵を描かせるが、葛屋の胸を打つものではなかった。

翌寛政4年から、歌麿に美人大首絵を次々と描かせて評判となるが、その後写楽を見出し、寛政6年、背景を黒雲母摺にした大判の役者絵28図を出版し、世間を驚かせた。この年、勝川派を離れていた北斎は宗理を名乗り、細身で目鼻が小さい、う

りざね顔の女性を描いた宗理風美人図を創り上げたため、葛屋は注目したようだ。寛政9年春に狂歌本『柳の絲』①に北斎を参加させている。この年5月に葛屋は没し、初代の番頭、婿養子となった勇助が2代目葛屋重三郎を継ぐ。この2代目は、初代から目をつけていた北斎にさまざまな狂歌絵本を描かせる。『潮来絶句』(1802年)、『画本狂歌山満多山』の代表作の他、享和期(1801～4年)に「風流無くてなゝくせ」②を2図描かせている。これは宗理風美人図の傑作中の傑作である。

ところで『柳の絲』に北斎が描いた「江島春望」①の図では、司馬江漢の油彩画に刺激された洋風表現の中に大波が描かれている。この大波は文化年間(1804～18年)の読本挿絵の中でさらに増幅され、波頭が鉤爪のようになってゆく。そして「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」③で世界に衝撃を与えた巨大な大波が完成する。しかし、北斎はこの波で満足せず、80代後半、信州小布施へ行って、上町祭屋台天井絵に波濤図を描き、渦巻く波に生命を与えた。北斎が生涯追求し続けた波の表現の萌芽は、葛屋との仕事で見られていたのである。



①『柳の絲』江島春望

紙、多版多色摺木版 18.9×25.3cm 1797年 東京国立博物館蔵

葛屋が出版した狂歌絵本に、北斎が描いた挿絵。このときすでに、波の向こうに富士山が見える構図を描いていた。

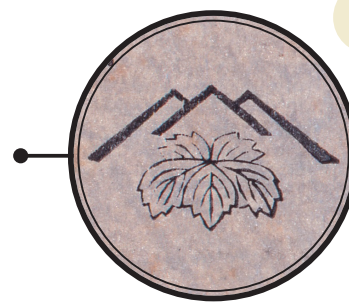


② 風流無くてなゝくせ 遠眼鏡

紙、多版多色摺木版 36.8×24.8cm

1801年～1804年 神戸市立博物館蔵(兵庫県)

母娘と思われる二人の女性が描かれ、若い女性のほうは遠眼鏡(望遠鏡)をのぞき込んでいる。「無くて七癖」とは、人には何かしらの癖があるという意味のことわざだ。遠眼鏡を夢中になっているのぞく娘の「物見癖」を描いたとされている。



山型に葛の葉のマークが、葛屋が出版したことを示す「版元印」だ。

③ 富嶽三十六景 神奈川沖浪裏

紙、多版多色摺木版 25.7×37.9cm 1830～32年

メトロポリタン美術館蔵(アメリカ)



安村敏信

北斎館館長、静嘉堂文庫美術館館長。1953年 富山県生まれ。東北大学大学院修士課程(日本美術史)修了。1979年より板橋区立美術館に勤務。同館館長を経て現職。主な著書に『絵師別 江戸絵画入門』(東京美術)、『江戸絵画の非常識』(敬文舎)など多数。光村図書中学校「美術」、高等学校「美術」教科書の編集委員を務める。

